◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第5回／アンリ・ラパン（前編）

Residence of Prince Asaka 1933—

アール・デコの館、旧朝香宮邸（あさかのみや）の誕生に遙かフランスにおいて尽力した人物が装飾美術家アンリ・ラパン（Henri Rapin, 1873-1939）です。ラパンはこの邸宅の主要室内である、一階の「大広間」、「次室（つぎのま）」、「大客室」、「大食堂」、「小客室」、二階の「殿下書斎」、「殿下居間」、計7室を担当し、アール・デコ様式の粋を集めた室内をデザインしました。

パリに生まれたラパンは、新古典主義の画家に絵画を学んだ後、装飾美術家に転身、建築から家具、壁画、陶磁器のデザインなど、今日でいうデザイナーとして幅広く活動します。1925（大正14）年、パリで開催されたアール・デコ博覧会では「フランス大使館」や「国立セーヴル製陶館」など多くのパヴィリオンのデザインを手掛けました。

ラパンと朝香宮両殿下との出会いは、このアール・デコ博覧会であると考えられています。この博覧会を公式訪問した朝香宮両殿下が、国賓をもてなすための「フランス大使館」の大広間（図1）に通され、ラパンのデザインに注目したことは、ほぼ間違いないでしょう。この部屋は、ラパンがピエール・セルメンシャンと共同で構成デザインしたもので、鏡貼りの扉やその上の鉄製の半円飾り、壁面のレリーフ、また噴水模様の鉄製パネル、飾り柱の装飾など朝香宮邸との共通点が数多く見られます。殿下は帰国後、新御殿の室内装飾にラパンを抜擢し、博覧会のパヴィリオンさながらフランス生粋（きっすい）のアール・デコ様式を自邸で再現しようとしたのです。新御殿をめぐる朝香宮両殿下とラパンとの綿密な打ち合わせは設計初期の段階から行われ、1930（昭和5）年には、すでに大食堂の模型が日本に送られていました。しかし、それらの手紙や図面等は朝香宮家の私信として扱われていたため、公的機関には残されておらず、残念ながら現在では実物を見ることはできません。

ラパンはガラス工芸のルネ・ラリックをはじめ、マックス・アングラン、彫刻家ブランショ、鍛鉄（たんてつ）のレイモン・シューヴなど腕の立つアール・デコの作家仲間を動員し、自らも壁画を描き、噴水塔（「香水塔」）や家具をデザインするなど、朝香宮邸の設計に情熱を注ぎました。これらの内装材は殆どのものがフランスで仕立てられ、あとは組み立てるばかりにして船で日本に送り出されました。ラパンは一度も日本を訪れることはありませんでしたが、それらは日本の職人たちの手で見事に完成され、アール・デコの館、朝香宮邸は1933（昭和8）年5月に竣工したのです。（次号に続く／岡部）◆

図1

図1.「フランス大使館」大広間
構成デザイン：H.ラパン、P.セルメンシャン、金工：E.ブラント、織物：R.デュフィ、家具：L.ブーシェ、絵画：J.デュパ 他

図2

図2. アンリ・ラパン 1925年頃